

暮らしを描く、第二の人生

— 年間300枚の絵手紙 —

齋藤 持右衛門 さん



PROFILE

さいとう もちえもん (77歳・白浜区)

妻の博子さんと二人暮らし。子ども3人と孫6人はいずれも同じ白浜区に住んでいる。頻りに顔を合わせる孫との時間が、何よりの元気の源だという。



▶ 持右衛門さんの日常を描いた絵手紙と皿

日常を描く絵手紙のある暮らし

夕食後の静かな時間、机に向かい筆をとる。そんなひとときが持右衛門さん(白浜区)、77歳の一日の締めくくりである。

持右衛門さんは元銀行員。退職後、第二の人生の入口で出会ったのが「絵手紙」だった。絵手紙の魅力に引き込まれ、10年以上になる。現在は「絵手紙同好会」の講師を務め、月に2回、仲間3人とともに活動している。果物や野菜、植物など身近なものを題材に描いた絵に、相手に伝えたい言葉を添えるのが魅力である。

持右衛門さんのこだわりは、描いたモチーフの名前をそのまま文章にしないこと。例えば、大根の絵に「おいしそうな大根」とは書かない。「イカと煮ようか、おでんにしようか」のように、暮らしの情景や気持ちににじませる表現を大切にしている。持右衛門さんにとっ

て絵手紙は特別なものではなく、日常の一部。自分の感情や日々の積み重ねを記す「絵日記」のような存在である。

持右衛門さんは、白羽小学

校4、6年生のクラブ活動で、「はばたき先生」としても絵手紙を指導している。子どもとの自由で柔軟な発想は、大人とはまた違った魅力があり、「時には大人よりも素敵な作品を作る」と目を細める。同年代である同好会とは異なる面白さがそこにある。

作る喜びにあふれる日々

創作の楽しみは絵手紙だけにとどまらない。4年前から始めた陶芸では、自作の器に絵や言葉を添え、唯一無二の作品を生み出している。食卓に並ぶ食器のほとんどが自作したもので、「よりおいしく感じられる」とほほえむ。

退職後は、家業である茶の生産にも携わるようになった。茶農家が減少する中、地域の一員としてその営みを支えている。さらに、サトウキビを使った黒糖シロップづくりなど、自給自足の暮らしも実践。「自分で考え、作ることが楽しい」と語る。家族、趣味、地域との関わり、そして畑仕事。「日々の営みそのものが暮らしを豊かにしてくれる」と穏やかな笑顔を見せる。